

恋するデザイン2

Y u i & Y o u

斉河 燈

Tob Saikawa

termity



エタニティ文庫

Contents

恋するデザイン2	5
歌い鳥、嘯く ^{うそぶ}	241
次点の憂鬱	271
彼女の弱気と僕の強引	307

恋するデザイン2

結婚なんて自分には一生縁がない——、と、お一人さまに慣れきったあたしは、数ヶ月前まで本気でそう思っていた。

「——と、いうわけで、来年の春夏コレクションにおける当方からの提案は以上です。気になる点がありましたら、なんなりとご質問下さい」

タバコの煙に燻されながらプレゼンを終えたあたしは、壇上から総勢十五名のお偉方を悠然と見下ろす。よし、今回も無事にやりきった。自分を褒めてやりたいのはやまやまだけれど、ここは取引先メーカーの会議室、ゆえにしばしお預けとする。

「些細なことでも構いませんよ。文法が間違っていたとかいうツツコミでも。あ、私、訛ってませんでした？」

ド田舎出身なので、と付け足すと、会議室がどつと揺れた。壮年のおじさま方をほぐす際には、ベタな笑いこそが活きる。これはあたしのプレゼン必勝メソッドのひとつ。

そう、必勝なのだ。

自虐ネタを晒してでも、プレゼンには勝利しなければならぬ。でないと我が小野原デザイン事務所——というのはあたし、小野原惟ちなみに三十歳、が代表を務めている会社なのだけれど——は弱小ゆえ、簡単に潰れてしまう。

毎日が存続の危機、とはいえ安定した仕事でないことは最初から分かってきたことなので、悲壮さはさほどない。

「あの」
場の空気が和んだからなのか、ひとりの男性が笑顔で拳手をした。企画室室長の財前さんだ。

「なんででしょう」
「小野原さん、今回メンズのバッグにもピンク色を採用してきたのはなぜ？ 男性向けの雑貨では、ブルーやグレーに絞ったほうが無難ではないかな」
やっぱり来たか。来ると思ってたんだ、その質問。

あたしは手元の資料を素早く捲って、目線で部屋の後方に合図を出す。そこに待機していた部下の男子がひとり、焦った様子で模造紙を広げた。

「あちらをご覧下さい。春夏におけるメンズ雑貨のトレンドカラー、過去五年分の経年変化をグラフにまとめたものです。徐々に寒色が減り、暖色の占める割合が増加傾向に

あるのがお分かりいただけるかと思えます」

「ですが、暖色の中でもなぜピンクを？」

「そうですね。ピンクは近年、車のボディやパソコンのカバーにも盛んに取り入れられています。アイテムの持つイメージをより柔らかく、新鮮に見せる効果に長けているのです。加えて不況や災害が続く昨今、ピンクの醸し出す優しさは、男性にとっても精神に安定を与えてくれるものとなるでしょう」

なるほど、と財前さんが顎を撫でたので、あたしは一呼吸おいて、もう一押し。

「余談ですが、私自身、働く女性として癒しを求める気持ちが常にあります。女性の社会進出に伴い、男性と女性の価値観はとも近くなっていると思います。女性が男性寄りになり、男性は女性寄りになり……もちろんいい意味で、ですが」

後方で模造紙を掲げている彼に目配せをして、さらに言葉再继续。

「今やピンクとは女らしい色でなく、優しさの象徴。個人的には、それが現代の男性が持つ柔軟さにも通ずると思うのです」

言い切ると、模造紙がスツと下ろされた。紙のうしろから姿を現したのは、ピンクのシャツを着込んだあたしの部下だ。これはあらかじめ仕込んでおいた演出。きつと突っ込まれるだろうなと思ったから、昨夜、彼にそれを着てくるよう、根回ししておいたのだ。

彼——水元杳ちなみにもうすぐ二十七歳——は少女と見紛う可憐な容顔で、柔らかく

笑って頭を下げる。

ふわふわとした空気感のある天然パーマの茶髪に、黒目がちの大きな瞳。くつきりとした二重は長い睫毛に飾られており、さながらルーベンスの描く天使だ。

そんな彼の姿を見て、財前さんも「ほう」と納得したように頷いてくれる。周囲から「悪くないね」という声も聞かれ、感触は概ね良好、のよう。

「他に質問はありませんか？ ……では、これにて締めさせていただきます。本日はご静聴、ありがとうございます」

プレゼンを終え、メーカーさんの自社ビルをあとにしたあたしたちは、その足で駅前のタリーズコーヒーに立ち寄った。時刻はすでに十八時を回っており、本日はこれにて直帰だ。

「あーっ、やっと終わったあー！」

壁際のソファを陣取り伸びをすると、体中の関節がパキパキ疲労を訴えた。あんたたち、お疲れさま、と心中で自分の体に労いの言葉をかけるとともに、「頑丈に育ててくれた両親にも感謝する。ありがとう父、母よ。徹夜明けですが、あたしは今日も元氣です。「お疲れさまです、先生。飲み物、カフェラテでいいですか」

遅れてやってきたのは部下の男子、杳だ。グレーのワークパンツに先程披露したピン

ク色の半袖シャツ、そして筒状の長い図面ケースを斜めに背負った彼は、やはり天使のよう。

「うん、ありがと。杵も本当にお疲れさま。これでようやく今月の山場は越えたわね」

「そうですね、飛び込みの仕事が入って来なければ、の話ですけど」

「それは禁句。今日はもう、締め切りのことは忘れさせて……」

「す、すみません」

焦ったように詫びつつ、杵は荷物を次々と下ろし、身軽になったところで席についた。

「そういえば夜中に突然、明日はピンクのシャツで来いなんてお願いしてごめんね」

「いえ、実は電話を頂く前から着ていこうと思って、アイロンもかけてあったんですよ。だから気にしないでください」

「アイロン。……自分でかけるものなのね」

あれはクリーニング屋の特殊技術なのだと思ってたわ。

家庭的な彼に感心しつつ、あたしはホットのカフェラテを啜った。シロップ半分、とオーダーしてくれたのだから、甘さ控えめで好みの味だ。が、なんだか今日は物足りない。

「ねえ、そっち、なに？」

「ハニーミルクラテです。飲みますか？」

「うん、ちょっと交換させて。頭を使ったせいかな、甘いものが欲しくて」

杵が差し出してくれたカップを、あたしは失礼してぐっと傾ける。甘い。間接キスも手伝って、それはこの上なく甘く喉に沁みる。杵は文句を言うどころか嫌な顔ひとつせず、ふふふと小さく笑ってくれた。

「先生、最近甘党ですねえ。以前はコーヒーと言えばブラックで、がばがば飲んでたのに」

「あら。誰のせいだと思ってるの？」

あたしはいたずらっぽく笑い返して彼にずいと迫る。

「ば、僕のせいですか」

うるたえる様も可愛いなんて、とんでもないオトコよね。

「ちがう？ 毎日甘いコーヒーを淹れて、あたしを甘やかしてくれてるの、杵じゃないの？」

これは責任転嫁半分、事実半分の話。今日、あたしが糖分を欲しているのは疲れているからだろうけど、杵が毎日事務所で淹れてくれるコーヒーの味に慣れ始めているのは真実。

そしてコーヒーよりさらに糖分過多なのは、彼の、あたしに対する態度そのものだったりする。

というのも――

「そ、それはたしかに、先生にコーヒーを淹れてるのは僕くらいですけど……」

「先生じゃなくて惟。ふたりきりの時はそう呼ぶ約束でしょ」
 あたしと彼は現在上司と部下でありながら恋人関係にあり、その上、婚約までしている仲なのだ。

何度考えてもおかしい。杓は以前勤めていたデザイン会社で部下だった男で、あたしが独立すると言ったらくつついて来た、ただそれだけの存在で、これからもずっと部下、あるいは弟か、なんなら妹程度でしかないと思っていた。恋愛対象になんて、なる予定はなかったのに。

「えと、じゃあ……惟さん」

すると、彼はあたりを窺^{みか}つて恥^{かた}ずかしそうに言い直すから、たまらず頭突きでもくれてやるうかと思つた。

「もつと堂々と呼んでよ。あたしたち、婚約者でしょ。こつちが照れるわ」

付き合い出して半年以上経つのに、どうしてそんなにいつまでも初々^{うつく}しいのよ。反応に困ってしまう。

「だ、だって。プレゼンをする惟さんは、やっぱり僕にとつて憧れのデザイナーさんで、大先生だなど再確認してしまつて」

「やあね、『憧れのデザイナー』っていうのは、レイモンド・ローウィのような偉大な先人を指す言葉であつて、こんな平凡な輩^{やから}に使う言葉じゃあないの」

「ゆ、惟さんが平凡、ですか」

「なによ、その半笑い。平凡でしょ。あたしが平凡じゃなかったら、パンチだつて平凡じゃなくなるわ」

「……随分と古い雑誌をご存じで」

ちなみにローウィはあたしが最も尊敬するデザイナーで、たばこの「ピース」や「ラツキーストライク」、そして「コカ・コーラ」のデイスペンサーを手掛けた、インダストリアルデザインの祖。彼に憧れ、あたしはこの世界に足を踏み入れたのだ。

そう、デザインというコアッションを思い浮かべる人が多いだろうけれど、あたしの専門はプロダクト。主に工業製品のデザインなのだ。

「それにしても、今日もカッコよかったです。惟さんは仕事をしている時が一番素敵ですわ」

「本当？」

「はい。また惚^ほれ直しちゃいました。今晚はプレゼンの打ち上げがわりに、惟さんの好きな中華、たっぷり作りますから楽しみにしてください」

「ありがと。朝からずつと楽しみだったのよ。ここ二週間、準備に追われてなかなかデートもできなかったし」

だから今朝「今晚は僕の部屋でデートしませんか？」なんて誘われた時は、ガラにも

なく浮き足立ってしまった。そのお陰でブレゼンが成功したと言っても過言じゃあない。あたしは杓の手にハニーミルクラテを戻し、それからふたたび顔を近付けて、その耳元にささやいた。

「……ねえ、ご飯を食べたあと、そのまま杓の部屋に泊まってもかまわない？」
 いいわよね。駄目とは言わせないんだから。

すると直前まで照れて若干挙動不審だった彼は、ふいに小悪魔っぽい笑みを浮かべて、
 「そんなの、聞くまでもないでしょう」

と、テーブルの上のあたしの手を、存外大きな手でぎゅっと握った。
 「僕は最初から、惟さんが帰りがつても帰さないつもりでしたよ？」

三十分後に店を出たあたしたちを、待ち伏せていたのは眩しい夕日に彩られた景色。そびえるビル群はどれもが黄金色の反射光を発しており、インゴットのように絢爛だ。実家の縁側から眺める、稜線に沈む夕日はもっと鮮やかな朱で、まさに壮観なのだけれど、これもまた別の意味で見事な光景だと思う。そんなことを考えながら目を細めて歩き出すと、夏の盛りの蒸し暑い空気が体にまとわりついてきた。

付き合ひ出した冬、関係を深めた春、突然のプロポーズに肝を冷やした初夏がなんだか懐かしい。そう思うのは、このところ締め切りに追われてプライベートな時間から遠

ざかっていたから？

「あ、そうだ。買い物していつでもいいでしょうか。甜麵醬が切れそうで」

駅につくと、杓はロータリーの向こうのスーパーを指さしてそう言った。
 「メンメンチャン？ なにそれ。パンダの名前？」

響きからしてメスね。

真面目に言ったのに、杓はしらけた顔でこちらを見上げる。本日、いつもより高いヒール靴を履いたあたしと、彼の身長差は二十センチ超。デコボコぶりを気にするわけではないけれど、ハイヒールは一刻も早く脱ぎたい。でなければ纏足状態で爪先が死にそうだ。「たしかにパンダっぽいですけど……そこは否定しませんけど。あのですね、テンメンジャンは調味料の名前ですよ、調味料」

調味料!? あたしは内心仰天していたものの、平静を装って知ったかぶる。

「あ、あー、あれね、わかった、赤くて辛いヤツ」

「残念、黒くて甘いヤツです。惟さんは本当に、料理となると途端に疎いですね」

冷たい視線を送られ、返す言葉もなくなってしまう。

社会に出てから仕事しか頭になかったあたしは、炊事も掃除も苦手というダメ人間。対する杓は主婦に匹敵するほど家庭的で、あたしにそれを要求したりはしない、できた男だったりする。我ながらいい獲物を捕獲しました。

そんなやりとりをしながらスーパーへ歩き出すと、杵のポケットから着信メロディが聞こえてきた。

「すみません、出てもいいですか」

どうぞ、と答えると、杵は沿道の植木に駆け寄り、その下で携帯電話を耳に当てた。

「もしもし、あ、いっちゃん？」

いっちゃん、というのはあたしのアシスタントの女の子で、杵に次ぐ部下その2だ。

事務所からだったのか。プレゼン終了の確認かしら、なんて呑気に思っていると、彼は眉をぐっとひそめて「え？」と聞き返している。

「なにかあったの？」

「はい、あの——トラブルだそうです。先週、僕がデザインを提出したパズル、目星を付けていた材料が手に入らないらしくて」

「え、じゃあ製造はどうなるの。向こうはなにか言ってきてる？」

「ええと、代替案を出してくれと。別の材料を輸入するから、サンプルを見て選んでほしいとのことなんです。至急、……今から」

語尾に行くに従って、消え入りそうになる杵の声。今から、か。あそのメーカーは確か、ここから地下鉄で三十分。帰宅は早くて二時間後かな。デートは諦めたほうがよさそうだ。

腕時計を見ながらうろたえる杵の背を、あたしはポンと叩く。

「なら、急いで行ってらっしゃい」

「でも、デートが」

「仕事優先に決まっているでしょ。デートならいつでもできるんだから」

いつでも、なんて嘘だ。事実、ここ二週間は個人的に逢ったりはできなかったし。だから本当は側においてほしかったけれど……。ショックで放心しそうになる自らを律し、無理矢理きゅつと口角を上げる。

「早く取引先へ行って、トラブルを解決してきなさい。これは上司命令よ」

ああ、どうしてあたし、年上で上司なんだろう。泣きたくなる。だけど……ワガママなんて言えない。公私混同なんてしたら最後、事務所倒産へのカウントダウンが始まる。部下たちの生活がかかっている以上、そんな無責任なこととはできない。

——仕方ないのよ。

すると杵は決意したように「はい」とひとつ頷き、電話を切ると、おもむろにポケットを探った。

「じゃあ、あの、これ」

そこから、突如あたしの前に差し出される彼の拳。不思議に思いつつも素直に応じて右手の掌を見せれば、そこに乗せられたのは小さなクマのぬいぐるみだった。杵らしい

持ち物だけれど、なぜに、今、クマ。

しかしよくよく見てみれば、それはポールチェーンでひとつの金属に繋がっている。

「……鍵？」

どういうこと？

「僕の部屋の鍵です。なるべく早く戻るようにしますから、待っていてもらえませんか」
「えっ、ま、待つって」

「先に僕の部屋へ行って欲しんです。キッチンも、好きに使ってかまいませんから」
息を呑むあたしの手に、それを念入りに握らせて彼は言う。

「どうしても今夜、あなたと一緒にいたいんです。あなたのこと、独り占めしたいんです。お願いします。——では、行ってきます！」

「よ、杳っ」

慌てて呼び止めなければ彼は振り返らず、駅へ向かう人混みの中へ、あつという間に消えてしまった。茫然とその背を見送ったあたしは、やけに熱い右の掌に視線を落とし、動揺のあまり卒倒しそうになる。

か、鍵。彼の部屋の、鍵。

これで彼の部屋へ入って、帰りを、待つ？

「うそでしょ……」

動悸がとまらない。気のせいか、顔が熱い。やだ、どうしよう、あたし……こういうの、人生初かもしれない。

杳が暮らす部屋は昭和のレトロな雰囲気漂う、木造アパートの二階の隅。あまりにも年季が入っているので、最初に訪れた際は仰天して、取り壊し寸前か、なんて思ったものだった。最近は随分慣れたけれど。

「……おじゃましまーす」

あたしは彼から預かったクマ、もとい部屋の鍵を鍵穴に差し込み、そろりとノブをひねる。ほ、本当に開いた。跳ねる心臓を押さえ、なんとなく忍び足で入室。うしろ手にドアを閉めれば、暗闇の中、彼の匂いがふつと鼻を掠めた。杳の部屋だ、と実感して胸がじんとする。

どうしよう、嬉しい。

「いや、喜ぶ前に電気電気」

電気をつけないと。ハイヒールを脱ぎながら壁を手で探り、スイッチのありかをつきとめる。予想よりはるか下にあったそれを指で押すと、パチッという音とともに視界がひらけた。

随所に和の趣を残した1Kの部屋。床はアンティーク調のフローリング材で覆われて

おり、家具も同様のこげ茶色で統一されている。品のいいアンティークショップを思わせる内装だ。もちろん、これは彼の手によるリフォーム及びコーディネート。

あたしは部屋の隅にあるモスグリーンのソファにバッグとジャケットを置き、落ち着かない気分で狭いベッドに腰掛けた。

「妙な気分……」

彼のいない部屋で彼の帰りを待つなんて。仕事が忙しいのはずっとあたしのほうだったし、だから待つのは杳の専売特許だと思っていたのに。

(いや——)

そもそもあたしは、自分がこんなに乙女チックなシチュエーションに胸を高鳴らせる日がくるなんて思いもなかった。ましてや、その相手がよりによって、長年部下だった杳だなんて。

「うー、改めて考えてみるとこの状況、恥ずかしすぎる。そ、そうだ、仕事しよう」

じっとしていることに耐えきれなくなつて、あたしはバッグから手帳を取り出すと、座卓の上にそれを広げた。このまま杳のことばかり考えていたら頭がトロけてしまう。

しかしアイデアを練り始めたものの、ふと気付くと部屋を見渡して、彼の気配を探している自分がある。

杳、いつも仕事から帰るとどこで何をしているのかな。料理をする時はどのへんに立つ

ているのだろう。……いやいやいや、仕事仕事、集中集中。

あ、そういえば昨日はアイロンをかけたとか言ってたな。こんなに狭い部屋の、どこでアイロンなんて……いや、だから仕事に集中だつてば！

「だめだこれ、一旦コーヒーでも飲んでリフレッシュしよう」

そう思い立ったものの、出来上がった液体を口に含んだ瞬間、あたしは豪快に嘔いた。
「ぶっは、渋っ!？」

これ、本当にコーヒー？ 渋い上にぬるくて奇妙な味がする。いつも杳が使っているサイフォンで、杳がやっているように淹れたのに、なぜ。

他にもっと、手軽に美味しく淹れられるコーヒーメーカーはないのか。背伸びをして、キッチンの上の戸棚を探してみたけれど、我が家にあるようなタイプのものは見つからない。それ以上探す気力もなく、あたしはうなだれて腹部をさすった。

「お腹、すいたな……」

杳と別れてから一時間、空腹も限界だ。

冷蔵庫の中には剥きエビやら肉の塊^{かたまり}っぽいものやらが入っていて、とりあえずレンジに突っ込んで塩でも振れば食べられないこともなさそうなのだけれど、勝手に手を付けるのは申し訳ない。美味しく調理してもらったほうがいいに決まっているし。

(缶コーヒーでも買に行くか)

そんなことであたしは、財布とクマだけを手に杓の部屋を出て、近所のコンビニへ向かったのだった。

「いらっしやいませー」

コンビニはいい。なんだって想像力を働かせずとも買える物ができる。仕事帰りには格好の場所だとあたしは思う。

棚はすべて見やすいように配置されているし、どの地域のどの店舗に入っても大概同じモノが同じ場所に置いてある。食品は調理済みでなおかつ温めてすぐ食べられるようにしてくれるし、スーパーのように立ち並ぶ食材を前にして、どれをどうやって食べたらいいか、なんて面倒なことは考えなくていい。日がな仕事に想像力を搾り取られているあたしは、ここへ来ると心底ほっとする。

(コーヒーはミルク入りで、と)

買い物カゴには、まずカップ入りのカフェオレを入れた。「胃を労いたつてください」と杓からいつも言われている。以前は気にも留めていなかったけれど、たしかに彼の淹れられるミルク入りコーヒーを飲むようになってから、体の調子がいい。

——このまま感化されつづけたら、あたし、一年後には別人のようになるわね。

そんなことを考えながら何気なく雑誌コーナーに差し掛かると、一冊の雑誌が目

び込んできた。煽り文句は『失敗しない式場選び』で、表紙で微笑んでいるのは純白のヴェールをまとった花嫁姿の外人モデル。

要するに、結婚情報誌ってやつだ。

(式場、ねえ……)

式をあげる予定は今のところないけれど、なんとなく気になってあたしは足を止めた。けれどすぐ横に女性誌を立ち読みしている女子高生がいたので、決まりの悪さに耐えかねてそこを素通りする。

次いで、スナック菓子の隣のおつまみを眺める。あ、あたりめでもつまもう。あとピスタチオ。となるとビールもほしくなるわね。一応杓の分も含め二本買っておう。

それらを買う物カゴに入れた後、チラと雑誌コーナーに目をやれば、女子高生は早々に立ち読みを止め、アイス売り場へと移動していた。

迷った挙句、あたしはもう一度そそくさと雑誌コーナーへ戻る。いや、別に結婚式がしたいか思っているわけでは。だって散々結婚なんかしてたまるか、とお見合いから逃げ回っていたあたしが、このあたしが、自ら志願してウェディングドレスとか……ないない。ガラじゃない。

しかし感情とは裏腹に、目が表紙の煽り文を読んでしまう。

なになに、『彼ママと会う時の注意点』そんなのがあるのか。そういえば、杓は我が

家に挨拶に来てくれたけれど、あたしはまだ杣のご家族に会っていないつけ。

知っておくべきよね、こういうの。とはいえ目の前がガラス張りなのが気掛かりだ。もし知り合いに目撃されたらコトだもの。

(まったく、なんでこの棚、こんなに日当たりのいい場所にあるのよ。本が日に焼けちゃうじゃないのよ)

心の中でブツブツ言いながらも、あたしは無意識のうちに背後に注意を払っていた。例の女子高生はレジへ行つたし、他の買い物客がこちらへ来る様子もない。前方にも人の気配はなし、立ち読みをするなら今だ。

(えー、ちよつと失礼して……)

あたしは視線を別の雑誌に向けた状態で、そうつと結婚情報誌を手取る。お、重い。なにこれ、広辞苑？

すると突如、店の前をバイクが通り過ぎた。目の前が明るくなって焦つたあたしは、素早い動作で雑誌を元に……そう、元に戻したつもりが、足元の買い物カゴに入れてしまっていたのだ。

なにをやっているんだ、動揺しすぎだ！

急いでそれをカゴから出そうとして、ふと思う。

(これ、買って帰って部屋で見たほうが、誰に目撃される心配もなくていいんじゃないの)

さすれば照れることなくじっくり読める。じ、じっくり読みたいわけじゃないけど。別に……多分。

ごくり、唾を呑み下す。

そうだ、レジでの支払いという関門さえ越えれば、その先は安全地帯だ。間違いない。

しかしコンビニを出る時すでに、あたしは溢れんばかりの後悔をしていた。

——買わなきゃよかった。

なぜ、思い切らなくてもいいことを思い切ってしまったのだろう。考えてみれば今日、これから帰るのは自宅ではなくて杣の部屋なのに。

さらに痛恨だったのは雑誌がビニール袋に収められてしまったこと。白くて薄いビニールからは結婚情報誌の名前はもちろん、花嫁さんの笑顔や『彼ママ』『式場』『ウェディングドレス』などというあたしには到底不似合いな単語が透けている。

なんとこつばずかしい。耐え切れない！

だが一緒に飲み物やおつまみが入っているため、袋は抱えようにもうまく抱えられない。あたしはそれを右手に提げたまま、来た道を駆け戻った。

(店員さん、なぜ雑誌だけでも紙袋に入れてくれなかったの！)

レジでそれを言い出せなかった自分も悪いのだけど。でも、それさえ恨みに感じるほ

ど恥ずかしい。
と、前方から人影が近付いてきた。それも、両側の歩道をほぼ同時に。まずい、どちらにも逃げ場がない。

あたしは咄嗟に細い路地へと道を逸れた。何人たりと、この、ビニールから透けたあたしの羞恥心の源を拜ませはしない！

見れば、一帯は建て売りの住宅街らしく、似たような一戸建てが道なりに立ち並んでいる。

人影が行き過ぎるのを待って元の道へ戻ればよかったのだけれど、あたしはそのまま路地を足早に進んだ。ひとつ先で曲がって、さらに曲がって、元の道へ戻ればいいやと思つたのだ。

「……あれ？」

なのに、なかなか見知つた道に辿り着けない。おかしいな、こっちで合つてははずなんだけど。

仕方ない、引き返すか。そうして背後を振り返って、あたしは青ざめた。……どっちから来たっけ。

なにしろ初めて歩いた道、加えて夜の闇の中では、もはや角さえ見当がつかない。——ど、どうしよう。そうだ、携帯電話のGPS機能で現在位置を……

だがポケットを探しても、財布の他には呑気な顔をしたクマが収まっているだけで、携帯電話は出てこない。杵の部屋に、バッグごと置いてきてしまったのだった。

(あたしの粗忽者……！)

悔いても、時すでに遅し、だ。

こうして迷子を自覚してから、あたしは十分経ってもまだ住宅街を彷徨っていた。いつもより高いハイヒールのせいで足の裏がビリビリ痺れるように痛む。早く家に帰りたい。

ああ、プレゼンでは余裕で恥も晒せるのに、あたしはどうしてこう、恋愛が絡むとてダメになってしまうのだろう。不器用すぎて情けなくなる。

嬉しい時も、なんだか気恥ずかしくて素直に喜べないし、悲しい時も、ついつい強がつて可愛く甘えることができないし。

杵はあんなに真摯に接してくれるのに、ホント、あたし、ダメな女だ。

「……杵」

名前を呼んだらますますますますひとりを実感して、淋しさが増した。おかしいの。ひとりには慣れていたはずなのに、杵が側にいない、それだけでこんなに苦しい。

クマをギュッと握りしめ、下唇を噛む。

待っててくださいね、と言ってあたしにクマを握らせた、杓の温かい手が恋しい。「どうすればいいの……」

そうして、あたしらしくない台詞を発して、街灯の下にうずくまった時だった。アスファルトを踏みしめる微かな音が、後方から聞こえたのは。

「——迷子の子猫さんはこちらでしたか」

同時に、少年じみた柔らかい声が響く。まさか。

あたしはしゃがみ込んだまま恐る恐る振り返って、目を見開いた。

「よ……杓」

そこに、息を切らした彼が立っていたから。

真っ先に幻覚を疑ってしまった。あたし、杓のことを考えすぎて幻を見てるの？ だとしたら重症だ。つける薬のない某病。それも末期だ。

「どうしたんですか、鳩が豆鉄砲をくらったような顔になってますよ。子猫になったり鳩になったり、忙しい人ですね、惟さんは」

しかし彼の幻はそんなことを言って額の汗を拭い、近付いてくる。半信半疑でいたあたしは、差し出された手に掴まって初めて、彼が本物なのだと確信した。

「どうして、ここが」

「コンビニまでのルートで迷うといたらこのあたりですから」

「い、行き先、なんでコンビニだってわかったの……」

「部屋、鍵がかかっていてチャイムを鳴らしても反応がないし、惟さんの携帯電話は室内で鳴ってたし、隣の部屋の人に聞いたら出て行った足音がしたっていうし、それならコンビニだろうと。惟さん、お好きでしょ、コンビニ」

よくご存知で。その手に引かれて立ち上がると、今度は逆に杓が、そこにスツとしゃがみ込んだ。

「足、見せてください。……あー、やっぱり靴擦れしてますね」

ハイヒールを脱がせて、あたしの足を自分の膝に乗せる姿は、なんだか従者みただ。「プレゼンの時から変な歩き方をしたから、そうじゃないかなって思ってたんです。痛かったでしょう」

「べ、べつに、平気……」

「よかったら、こっちを履いてください。スニーカーですけど」

そう言って杓が差し出したのは自分が履いてきた靴だった。片方ずつ足にかぶせられて、焦ってしまう。

「でも、それじゃ杓が」

「僕は裸足でも大丈夫です。それとも、おんぶしましょうか」

「いやっ、それは流石さすがに。スカートだし、パンツが見える」

「なら、素直に履いてください。僕は惟さんが辛そうにしているのを見てるほうが、よっぽど辛いので」

杳の体温が移ったスニーカーはほんのり温かくて、縦にも横にもぶかぶかしている。小柄なのに、女の子にしか見えないのに、……ううん、だからこそ、かな。たまにこうして男としての差を見せつけられると、あたしは心臓わづつかを鷲掴みわづつかされている気分になる。

「……、ありがと」

繋かれた手が熱い。歩き出すと、杳はさりげなくあたしからコンビニの袋を奪った。

彼はあたしが荷物を抱えていると、いつもこうやって当たり前のように代わってくれる。

男には負けまい、と意地を張って生きてきたあたしの強がりつよがりを、誰より理解してくれている人。

「やけに重いですね、なにを買ったんですか？」

「えっ!？」

「そうだ、結婚情報誌」

自分で持つわよ、と叫んで奪い返そうとした時には、すでに遅かった。

「……ウエディングドレス？」

杳は袋を顔の位置まで持ち上げて、透けた煽り文あほを読み上げる。赤面しすぎて顔が爆発するかと思った。

「そっ、それは、し、しし、仕事の資料で」

「そんな依頼、なかったはずですけど」

「あ、ちが、……そっ！ い、従姉妹のね、親戚の友人のマブダチの姪っ子の末っ子から頼まれて……」

「どこのコンビニでも売っていいそんな雑誌、どうしてわざわざこんなに遠い知り合いに頼んだんでしょうね」

「うっ……」

答えに窮きましたあたしを黒目だけでチラと見る、見透かしたような顔が憎い。

「嘘が苦手ですよね、惟さんは」

「か、勝ち誇ったみたいと言わないですよ。どうせ不器用よっ」

「そういうところも可愛くて好きですよっ」

まさか、可愛くなんかはないわ。真っ向から否定してやりたかったのに、できなかった。住宅街に点々と灯る、家庭のあかり。時々鼻腔びこうをくすぐる、夕食の香り。これまで他人事だったそれらがとても身近に思えたら、なんだか目頭が熱くなってしまっ

あたしはいつか、この中のひとつになるんだろうか。

杳とふたり、こうして家族になっていくんだろうか。そんなことを考えたら、スニーカーの中で泳ぐ自分の両足が、なんだかとても幸せに思えた。

杳の部屋へ着いたのは五分後のこと。なんの事はない、迷子といいながら、あたしはアパート近辺をグルグル回っていただけだったのだ。なんとお粗末な。決まりの悪さに無言のままスニーカーを脱ぐと、繋いでいた手をグンと引かれた。

「え……っ」

一瞬で杳と壁の間に挟まれる。驚いている暇はなかった。斜めにすくい上げるような柔らかいキスをひとつ、それから一気に舌で攻め込まれて、めまいを覚える。

「……ン、よ、う」

杳のキスは繊細だ。唇も、舌の動きも。最も感じやすい上顎を舐められ、あたしは身をよじった。

「あ、杳、夕飯……、ッ！」

食べない気、なんだろうか。

次々奪越されるキスの合間に、あたしはただ熱っぽい息を吐くだけで精一杯になる。いつの間にファスナーを降ろされていたのか、ストンと音を立ててスカートが床に落

ちる。シャツの裾からは掌が滑り込んできて、左胸を押し上げるように掴んだ。

「……すみません、惟さん。本当は先に夕飯、食べさせてあげたかったですけど」
申し訳なさそうな声で杳は言う。

「僕の部屋の鍵を握り締めて、心細そうな顔をしているあなたを見たら、そんな余裕、なくなりました」

焦れた仕草で無理矢理ブラを下方へずらされる。それからシャツ越しに、胸の先を甘噛みされたら、高い声が漏れてしまった。

「んあっ……！」

本当にする気なの？

お腹は空いている。ずっとなにかを口にしたかった。なのに、徐々に空腹感が薄くなっていく。

杳の愛撫しか、感じなくなっていく。

目を閉じて彼に掴まっていると、突然ストッキングと一緒に下着までもが下ろされた。足の付け根を指でなぞられ、あたしは体をよじらせる。

「ン、ん……っ」

けれど、玄関の扉が目に入って、あげそうになっていた声を噛み殺した。ここ、扉、薄かったはず。

せめてベッドへ行きましょ、と言おうとすると、耳元でピツとなにかを破る音がした。なに？

そちらへ視線を遣ったあたしは、ゴムの袋を啜えた杓と目が合って、思わずぱっと逸らしてしまふ。

草しか食んでいないような顔をして、そんな。

そんな野獣っぽい目、反則だ。

「んああ、っ！」

予告なくナカを押し広げて突き込まれる、彼の体温。何度か様子を見るように浅い抜き挿しを繰り返し、やがて奥まで埋められる。

「あ、っあ……っつ、杓……っ」

あたしは震える手で自分のシャツのボタンを外した。どんなに薄いものにも、間を隔てられているのかもしれない。

「惟さん、綺麗です……」

露わになった胸の間に顔を埋め、杓はささやく。柔らかな前髪が素肌を撫でるのがくすぐったい。

彼が右胸の先を舐めはじめたから、あたしは左足を彼の腰に引っかけた。続けて、その首に腕を回す。すると待ち構えていたかのように、抜き挿しがじまった。

「んああっ、あ、よ、杓うっ」

綺麗です、と杓は息を荒くして先程と同じことを言う。

「あなたはいつだって綺麗で、仕事中は誰よりカッコよくて、だけど時々可愛くて、僕に対しては隙だらけで……っ」

なぜだろう、声が徐々に、焦燥を帯びていく。

「たまらないんですよ、そういう態度。煽られているとしか思えないんです」
隙だらけ？ 煽ってる？ そんなの、意識したこと、ない。

杓はあたしの乳房を強く吸って、強引に自分の跡を散らしていく。

たまらないのはこっちのほうだ。

いつも印象派の絵みたいにふんわりしているのに、こっちは時々牙を剥き出しにする。誰も見ていないところで、噛みついてくる。

そのたび、毒がまわっていくような気がするの。

「あっあ、あ、あ、杓、……杓っ、あたし、もう」

「もう、なんですか？」

「い、イっちゃ……っ」

ドアが薄いのはわかっているのに、声が抑えられない。あと一歩で達してしまいそう
で、快感に悶えるあたしを、杓はぐるりとひっくり返して壁に手をつかせた。

「ベッドへ連れて行く余裕、今日はないです。すみません」

「……あ、ああ、っ」

杳じゃないみたい。少しだけ不安になって肩越しにチラと顧みれば、嘔みつくようなキスで唇を塞がれた。ナカへの出し挿れは休みなく、両の乳房も荒々しく揉まれる。

「ん、ん……っふ、……っあー!」

息苦しさに耐えかねて、唇をずらす。杳は追いかけてきて、キスを繰り返す。ナカが湿った音を立てて、彼にさかんにかき混ぜられている。

「は、っあ、はあっ、ああっ、も、あたし、本当に」

「立っていられますか?」

尋ねながら、彼が探るのはあたしの足の付け根。そこにある敏感な一点を指先で苛めながら彼はささやく。

「不安なら、動くの、やめますよ」

そんなこと、しながら言う台詞じゃあない。それとも分かかっていてやってるの?

「や、ダメ、動いて、動いて……っ」

懇願しながら、あたしは壁についた両手をギュッと握りしめる。深く、奥を叩くように何度も突き込まれて視界が揺れる。

「いい……っ、イク……っああああ、っ!」

目の前に、パッと白い光が弾けた。

「……っ、惟さ……キツ……っ」

陶酔感が押し寄せてくる。胸に食い込む彼の指でさえも、心地よく感じてしまうのはなぜなの。壁にもたれたまま目を閉じて息を吐くと、杳も達したようで動きを止めた。

「は……暑……」

暑すぎて息苦しい。

クーラーもつけずに、狭い密室でこんなことをしたのは初めてかも。

気のせいか、結婚を承諾してからこっち、杳はなんだか強気になった気がする。

それから真っ先に向かったのはバスルームだ。お先にどうぞ、とのお言葉に甘え、あたしは熱いシャワーで全身の汗を洗い流した。

狭いアパートゆえ、脱衣所はない。着替えをするのはバスルームの中がお約束だ。あたしは今さらだと思うのだけど、杳がいちいち照れるので致し方ない。

ドアを数センチ開けて部屋を覗くと、いつも通りバスマットの上にバスタオルと着替えが準備してあった。着替え、というのはもちろん杳のパジャマだ。

それを引っ張り込んで、身に着けて、バスルームを出る。室内にはクーラーが程よく効いていた。

「出たわよ。シャワーと着替え、ありがとう。杵も……」

浴びてきたら、と言おうとしてリビングのほうを覗き込んだあたしは、目を見張った。海老チリに北京ダックに酢豚、そして炒飯に油淋鶏。テーブルの上に、それら中華料理店と見紛うばかりの料理の数々が並んでいたから。

「僕はあとからでいいですよ。どうぞ惟さん、座ってください。夕飯にしましょう」
「いつの間に……」

立ち尽くすあたしに、杵は重ねて着席を促しつつ、したり顔で笑う。

「びっくりしました？ 下ごしらえまでは済ませてあったので、あとは火を通すだけだったんですよ」

ああ、そういえば剥きエビやら肉の塊やらが冷蔵庫に入っていたっけ。

「……よかった、レンジでチンして塩かけて食べなくて」

「はい？」

「ううん、こっちの話」

あたしは彼の向かいに座るとともに、顔の前で手を合わせる。急に腹の虫が鳴き出した。部屋中が美味しそうな匂いでいっぱいになっている。

「いただきます！ よし、まずは海老チリね」

「ちょ、惟さん、ダイレクトに箸を突っ込まないでください。取り皿もありますから」

「いいじゃない、ふたりしかいないんだし。ん、この海老プリップリ！」

今日はカロリーなんて忘れよう。そう決めて次々頬張るあたしを、杵は満足そうに見て、自らも箸を手を取った。

「北京ダック、取りましようか」

「うん。タレ多めね。あ、こっちの油淋鶏もサクサクで美味しいっ。炒飯もパラパラだし、杵、本当にいい嫁になれるわあ」

「ほ、僕、そっちの役割ですか」

「違うの？ 大丈夫よ、杵のこと一生養っていけるようにあたし頑張るから」

言って力こぶを見せると、複雑そうな表情をされてしまった。

「でも僕は自分じゃなくて惟さんにドレス、着てもらいたいですけど……」

「やあね、あたしより杵のほうが似合うわよ、ウエディングドレスなら」

「……ウエディング？ 僕は単純にドレスと言っただけですよ」

なんだって！ あたしはしれっとしている杵から目を逸らす。誘導尋問だったのか。

「着たいんですね、惟さん」

「べ、別に。そこまでは」

言っていない。言っていないし、着たいとはっきり思っているわけでもない。ただ、なんというか、ちょっとだけ気になるかもしれないという、その程度の話で。

「そうですね。惟さんは綺麗なものと、デザイン性の高いものには目がないですね」

「そ——そうよ。あたしは単純に、デザインに対する知的好奇心から、結婚式というものに魅せられているだけであつて」

「なら、ちゃんとやりましょう」

「え」

きつぱりと言い切られて、あたしは北京ダックを口元にかまえたまま、固まった。やる、つて……

「結婚式、やる方向で話を進めましょう。忙しさにかまけて、なんとなくやり過ぎずのではなく」

「ほ、本気？」

「もちろん。あなたにはきつと後学のためにもなりますよ。それに、予定通り僕が婿養子に入るとなると、ひとつ大きな問題がありますし」

「問題、つて」

「僕が『小野原』の姓になることですよ。惟さんの名字がそのままだと、既婚者だ、つて昔なじみにはわからないじゃないですか。いつなんどき、僕のように長年の片思いの末、迫る男が出てこないとも限りませんからね」

牽制^{けんせい}しておきたいんですね、なんて平然と言つてのける彼を前に、あたしは忙しくまばたきを繰り返す。かみさま、この人は本当にあの、頼りなかつた查ですか？

「僕との結婚、知り合いに披露するのは嫌ですか？」

「や、あの、嫌つてことはないんですけど、あたしには似合わないというか……查だつてそう思うでしょ」

「ちつとも。だから問題なしですよ。僕、見積もりもらつてきますから、気になる式場があれば言つてくださいね」

「はいっ!？」

いつからこんな強引な男になつたんだ。いや、そういえばこのイザという時の押し強さ、以前からちよこちよこ予感させるものがあつたな……とは、認めたくないからこれ以上考えないことにする。

「明日は代休ですし、一緒にその、惟さんが買った結婚情報誌でも読みましょうか」

「ぎゃー、断るつ。それだけは断る。あれは今すぐ捨ててくる！」

「もつたい無いことしないでくださいよ。それなら僕がもらいます。あ、となるとあれはもう僕のもですね。ありがとうございます、では早速」

嬉々としてそれを持ってきて、目の前でページを捲^{めく}り出す查は、いまだピンクのシャツ姿。そこには安心感なんて微塵^{みじん}も漂つていない。

「あ、長身の惟さんにはこれ、似合うんじゃないですか。ロングトレーンのドレス。綺麗だろうなあ」

「うるさいうるさいっ。杵にはそのピンク、やっぱりちっとも似合わないわ!」

こうしてカッカしたまま杵の腕の中で眠りに落ちたあたしは、その晩『熱湯風呂に浸かった時間分、自社のコマージュナルを流してもらえ』という昔ながらのテレビ企画に参加し、花嫁姿で見事最長タイムを樹立、小野原デザイン事務所の名を世に知らしめた――

というよくわからない夢を、見たりしたのだった。

2

人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られてくたばれとか言う。

ならばあたしは過去に何度も昇天していなきやならないだろう。専門学校同期の友人である華子かこのこととか、華子のこととか、華子のこととかが原因で、だ。思えばあたしは若かった。華子の想いを散々足蹴あしげにするなんて。

しかし今回のことは馬にも判断が難しいはず。

人柄ならぬ馬柄のいいヤツであれば、峰打みねうち程度に留めておいてくれるかもしれないけれど、情け容赦ようしゃないタイプなら一撃で葬られること間違いなしだ。

なぜならあたしは恋路を邪魔しようと思っていたわけでは決してなく、親切心で口を挟み、結果的に関係を悪化させてしまっただけなのだから。

いや、させてしまっただけ、なんて、それは苦しい言い訳に過ぎないかも――

「えっ、来るんですか? ここに? 神保じんほさんがっ?」

その事実を告げるなり、いっちゃん目は丸くして、顔を赤くしたと思っただけに青ざめた。まるで信号機だ。

「わ、私、今日、ノーメイクなのにつ」

そうだったのか。あたしは思わずまばたきふたつ。いつもナチュラルだから気付かなかった。

陶器みたいな頬を観察しようとしたら、彼女は忙せわしく足を踏み鳴らして行ったり来たり――すっかり挙動不審になってしまった。

いいと思うけどね、ノーメイク。二十代も中盤を過ぎて素肌で勝負できるなんてすごいことだ。

「化粧道具、ないなら貸すわよ。洗面所に一式あるから好きに使ってちょうだい」

「本当ですか。ありがとうございます。助かりますー」
 ほっとしたように眉尻を下げる彼女は、本宮もとみやいつか——通称いっちゃん。我が小野原
 デザイン事務所のアシスタントその2、だ。

ショートボブの黒髪に、中肉中背で特に目立ったところのない外見。要するに「普通」
 で「地味」なわけだけれど、あたしはそれこそが彼女の取り柄なのだと思っている。

我々制作の現場では、「普通」を見失いがちだからだ。つい、奇抜へと道が逸それてしまう。
 その時、それを思い出させてくれるのが彼女の役割。

いっちゃんの「うーん」は結構アテになる。提出するアイデアには正直、もうひと工
 夫欲しいところなのだけれど。

「でもごめんね、個人的に話す時間はあげられないかもしれない。急だけど、打ち合わ
 せなのよ」

あたしは言いながら、髪を束ねる。

神保克之かづゆき——日本でも指折りのデザイン事務所『人望舎』の代表で、ちなみにあたし
 よりひとつ年上の男性。彼は日本におけるレイモン・サヴィニャックと称される、定評
 のあるグラフィックデザイナーだ。

作風は、温かみがあってユーモア溢れるもので、あたしも好きなことは好きなだけ
 れど、素直にそう公言したくない複雑な事情がひとつ。

いっちゃんだ。

そう、いっちゃんは神保さんに、神保さんはいっちゃんに、どうやら片思いのご様子。
 いや、双方思い合っているのだからこれは両思いと言うべきで、それはあたしもちゃん
 と分かっている。

けれど本人たちは、分かっているのかいないのか——出逢ってから半年以上、進展が
 ないとみて確実なのだ。

だって、もし共に夜を明かすような関係なら、今さらノーマイクでここまで焦あせらない
 でしょうし。

しかし正直、さっさとくっつけばいいのに、と思う気持ちと、このままでいて欲しい
 気持ちは半々。

二人が付き合い出したら、神保さんはいずれ、いっちゃんを連れて行ってしまっただろ
 う。つまり、せっかく育て上げた人材を、人望舎に引き抜かれる事態が予測できるからだ。

「仕事ですか？」

「うん。コラボしないかって、先方さんからね」

「コラボって、神保さんと先生が、ですよ。わ、すごい！」

「いや、まだ企画段階だからどう転がるかは未知数だけどね」

ああやだ、こなきやいいのに神保克之……

《お久しぶりです。その節はどうも》

応接室で向き合うなりそう書かれたメモ帳をこちらに向けた神保克之は、大粒のクリスタルガラスと見紛うばかりの透き通った目を細め、必殺マダム殺しスマイルを繰り返す。

しかしその唇は閉じたきり、言葉が発せられることはない。そう、彼は聴覚に障害があつて、コミュニケーション手段は今のところ筆談かメールに限られているのだ。

《いえ、こちらこそお久しぶりです》

あたしはそうメモ帳に殴り書いて差し出すと、音が上がらない程度に切歯して、ついでに舌打ちもして、コーヒーを飲み干した。

なにが気に入らないって、いや、もちろんいつちゃんのことみだけれど、まずはこの男の水戸黄門的ポジションを先に指摘したい。

要するに、両脇にスケさんカクさんを引き連れているのだ。その男たちがまた、彼と並ぶに相応しい美貌の持ち主だったりして、おかげでアシスタントの女の子たちが揃って微熱状態に陥り、まるで仕事にならない。納期に遅れたらどうしてくれるの。

ただひとり、いつちゃんは「あれっ!？」とたまげたような顔をしていただけで、一度訪問したことがある以上、知っていたはずだ。

人望舎が業界でも有名な、美形集団だということ。歌舞伎町で店でも開けばいいのに、ちくしょう。

《それにしても、今回のことはまた急なお話で》

ため息とともにそう綴る。

なぜならばこの話はメーカーを通して、つまり取引先から打診されたもので、あたしにとつては断りようのない案件だったからだ。

人望舎から直接話があつたのなら回避できないこともなかっただろうに、もうつ。すると神保さんは「ほらね」とでもいいいたげな顔で右隣の男をついた。

《すみません、船橋がいきなり言い出して、勝手に先方さんと話を進めてしまったんですよ。ご迷惑でしたよね》

ええもちろん、と書きたかったけれど堪えて尋ねる。

《神保さんの発案ではないんですか?》

《ええ、それが……こいつの一存で。まったくなにを企んでるんだか》

なぜだろう、神保さんも困っているみたいだ。

と、こいつと呼ばれた男、船橋がひらめいた顔でソファから腰を浮かせた。「ん、やっとわかった。この応接間、ローウイの事務所、模してらっしょ」

会話から完全に逸脱した台詞ではあったけれど、あたしは思わず食いつく。敬愛する

ローウィイの名を出されて、無言でやり過ごせるわけがない。

「わかります!? そうなんですすよー、あたし、ローウィイ大好きで」

「あ、やっぱり。格子窓にブラインド、カーテン、角のデスクの配置とか」

それぞれを指さしながら、反対の手でかきあげる髪はアッシュブラウン。クセ毛なのかパーマなのかはわからないけれど、ウィッグ不要のボリュームだ。

そして、そんな重めの前髪が引き立てるのは、穏やかな垂れ目。男性にしては珍しく涙袋がはっきりしていて、まなざしはこよなくセクシーだ。

「そうそうそう! 流石さすが、よくご存知ですね」

「そりやもう、なにせ『プロダクトの父』だから」

「ですよ。彼なくして今のあたしはいないってくらいです」

一気に盛り上がってから、はっとした。雑談をしている場合じゃあない。

このコラボ話、一体どういうことなの。神保さんに無断で話を進めた、ってこの男、なにを考えているの。

その疑問は、二時間後にあっさり解決することとなる。

「はあ、要するにあなたがたは、神保さんといっちゃんをくつつけたいわけね?」

「平たく言えばそうなりますね」

神保さんが席を外した際に、船橋さんの横で城しろさんが語ったのは、あたしにとつてはまずまず面白くない話だった。

なんと彼らはこの仕事をきっかけに、ふたりをより親密にさせたいのだという。

「……プライベートと仕事を一緒にするなんて、いかがなものかと思えますけど」

「そうは言うけど小野原サン、人間が生きてくにはプライベートも仕事も同じように大切大切でしょ?」

いかにも馴れ馴れしい言葉遣いで船橋さんが言う。はり倒したい衝動を抑え、あたしはあえて城さんに話を振った。

「他人の恋路じゃないですか。いちいち首をつっこむことかしら。こういうの、本人達が果たして喜ぶかどうか……」

城さんは黒ぶちの小洒落こじれた眼鏡が似合う、一重まぶたのインテリ風だ。フナムシ……おつと失礼、船橋さんより数倍、感じがいい。

「ええ、まあ。それが叶わないから、こうしてお願いにあがったんです」

お願いに、って今日は仕事の話がメインだったはずでしょうよ? あたしは苦笑いで嘆息ため息する。

そんなに暇じゃないのよ。こっちはもう、帳簿をつけてる時間もないくらいなんだから。「あのふたり、一時はそこそこいい関係になりかけてたんですよ。でも一悶着ひとしんぢやくありま